Osaka University Knowledge Archive

Title	アラビア語カイロ方言におけるテンス・アスペクト：談話機能的観点から
Author(s)	中道, 静香
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44185
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【3】

氏　　名	中道静香（なかみち しずか）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　17955　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**アラビア語カイロ方言におけるテンス・アスペクト－談話機能的観点から－**
論文審査委員	（主査） 教　授　高岡　幸一 （副査） 教　授　春木　仁孝　　助教授　三藤　　博

論文内容の要旨

言語がどのように時間を表現し、現実世界に生じうる多様な出来事をどのように文節化しているか、という問題は言語学において絶えず関心を払われてきたテーマである。これに対する一つの事例として、本論は「アラビア語カイロ方言におけるテンス・アスペクト」と題し、この言語の時間の表現を扱った。特に、本来の動詞である定形動詞と、新たに動詞体系に組み込まれつつある能動分詞（名詞）の役割分担に焦点を置き、主に談話機能的観点から分析を行った。

まず第2章では、カイロ方言の動詞にいかなるテンス・アスペクト的意味が文法化されているかについて、先行研究を検討した後、本論での立場を明確にした。カイロ方言には、具体的時間表現に関わる形式として、接尾辞活用形・bi-接頭辞活用形・ḥa-接尾辞活用形という3つの定形動詞があるが、いずれも相対テンスと内的アスペクトを複合的に備えていると考える。それぞれ、接尾辞活用形は先行性と完成相、bi-接頭辞活用形は同時性と非完成相、ḥa-接頭辞活用形は後行性と完成相と結びつく。ここでは、形態がもつテンス的価値として、基準時と出来事時の関係を示す相対テンスを与えているが、これらの形態が主動詞として用いられるデフォールトの場合には、基準時が発話時と同定され、それぞれ過去、現在、未来の絶対テンスを得る。またカイロ方言では、これらの定形動詞の他に、能動分詞が動詞として機能している。能動分詞は、定形動詞とは異なり、特定の時間指示に限定されないという性質をもつ。もっとも基準時との同時性（現在）が基本的機能であるといえるが、動詞のタイプや文に含まれる副詞等の付加要素、さらにはより広い意味での文脈によって、過去（パーフェクト相）や未来（前望相）の出来事も十分表し得る。つまり定形動詞と能動分詞は、全ての時間指示において共存していることになる。そこで両形式の違いを明確にするためには、それぞれの時間指示ごとの比較が必要であると考え、第3章で現在における定形動詞と能動分詞を、第4章で過去と未来における定形動詞と能動分詞の比較分析を行うことにした。

第3章では、現在指示の二つの形式、すなわち bi-接頭辞活用形と能動分詞に焦点が当てられる。先行研究では、bi-接頭辞活用形と能動分詞がそれぞれ「進行相」と「結果相（結果状態）」というアスペクト的意味と結びつけられ、これらの形式の意味実現はヴェンドラー流動詞分類の基準として用いられてきた。たしかに現在指示に関わる両形式は、それぞれ異なる継続的局面を表し、概ね相補的な関係にあるため、動詞の語彙アスペクトを浮き彫りにする格好の試験紙となる。しかし先行研究は、能動分詞が表すとされる「結果」（パーフェクト的意味）が主体に現れる場合

と客体に現れる場合との決定的な違いを積極的に区別しておらず、これまでに試みられたいくつかの動詞分類はいずれも何らかの矛盾をはらんでいる。

そこで本論は、「結果」が主体に現れる場合のみを「現在」に属する能動分詞、「結果」が客体に現れる場合は「過去」に属する能動分詞と区別し、動詞の分類においては「現在」に属する能動分詞と bi-接頭辞活用形のみが基準として利用されるべきだと主張した。ただ、本論は厳密な動詞分類リストの作成を主眼としているわけではなく、むしろこの二つの形式がいかなる事象構造をもつ動詞と結びつき、いかなる継続的局面を焦点化するのかという観点から考察を行い、それに付随する形で動詞の大まかな分類も行うというスタンスをとっている。事象構造の記述については、日本語の動詞分類で採用されている「動作」「変化」「状態」といった時間的展開と参与者（主体・客体）を組み合わせた形で行った。

bi-接頭辞活用形と能動分詞の典型的な役割は、それぞれ「動的（dynamic）」な事態の記述と「静的（static）」な事態の記述にあるといえる。そもそも能動分詞は形態的には名詞であるから、名詞の非時間性と無関係ではいられない。これが静的な事態を表すという働きに結びつく。しかし実際に能動分詞が表しうる継続的事態の範囲は、静的な状態だけでなく、一見動的な事態と考えられる移動や長期的活動にまで渡っている。一方本来の動詞形である bi-接頭辞活用形は、具体的かつ顕在的な動作（動き）や、意図的行為と結びつきやすい。このように、bi-接頭辞活用形と能動分詞は、それぞれ現在における異なる継続的局面を担当しており、両者は意味内容レベルでの違いを示していると考えられる。

続いて第４章では、主に過去指示の二つの形式、すなわち接尾辞活用形と能動分詞を比較した。現在指示の bi-接頭辞活用形と能動分詞の違いは、基本的にそれぞれが焦点化しうる継続的局面の違いに還元することができ、つまり文レベルでの考察で両形式の差異を明確化することができた。一方、過去指示の接尾辞活用形と能動分詞については、文レベルでの考察だけでは、その機能的差異を抽出することは難しい。もちろん文レベルでも、接尾辞活用形がいわゆる単純過去を、能動分詞が結果の残存を含意するパーフェクトを表すという点で区別できることも多いが、実際の使用はこれほど単純ではない。このような理由から、本章ではテクストレベルまで視野を広げ、テクストの中での両形式の違いを探ることにした。作業としては、まず「物語」テクストと「対話」テクストという二つのジャンルのコーパスにおける定形動詞と能動分詞の現れ方を調べた。それによれば、物語テクストに現れる能動分詞は、もっぱら接尾辞活用形に従属し、それが指示する過去との同時性を表すものであり、単独形で過去を表す能動分詞が現れるのは対話テクストにほぼ限られることがわかった。

そこで対話テクストにおける、過去を表す接尾辞活用形と能動分詞の生起環境を比較分析したところ、能動分詞は、単に結果残存性を含意するという点に集約できるものではなく、むしろその特徴は対人レベルに関わるところにあり、具体的にはこれから述べられる情報（内容）が聞き手にとって既知であると話し手がみなした状況において、現れることがわかった。能動分詞が、基本的に基準時との同時性（現在）を表すのであって、過去や未来の時間指示機能をもたないという性質に立ち返ると、能動分詞が用いられるためには、少なくともこれから発話される内容についての時間情報が聞き手との間で共有されている、と話し手が想定している必要がある。逆に言えば、対話者同士がその出来事の生起した時間を同定できる場合には、特に時間指示機能をもたない能動分詞が用いられた文でも、十分な情報量をもつ発話であるとみなされる。この時間の同定が話し手によって想定されるための条件としては、その行為の結果としての証拠が現存している、先行文脈によってすでに話題が提供されている、対話者がその出来事を共通の体験として認識していることなどが挙げられるであろう。つまり、能動分詞の「結果残存性」という特徴は、最も顕在化した形の共有知識であると考えられる。一方、接尾辞活用形は、それ自体過去指示を行う能力をもっているため、このような制約にとらわれることなく、対話者間の共有知識が存在しない場合でも、問題なく使用されるのである。

以上の考察の中で核となったのは能動分詞であったが、これに対し第５章では、もう一つの分詞である受動分詞とその前提としての受動文自体の考察を行った。動作主を明示せず、減項が前提となるこの構文がもつべき、発話に値する情報量とはどのようなものかという視点から、他動性、叙述法などを考慮に入れつつ、受動文成立の条件を探った。

本論は一貫して、名詞の形態をもちながら動詞として機能する分詞が、どのような形で動詞体系の中に組み込まれているかという間領を観察したことになる。現在を表す能動分詞は、同じく現在指示機能をもつ bi-接頭辞活用形と継

続相を分担しており、意味内容レベルで相補的な関係をなしている。一方、過去や未来を表す能動分詞は、むしろ対人的なレベルで定形動詞との機能分担を行っていることがわかった。

本論はカイロ方言という一言語の共時的分析であったが、これを足がかりに他のアラビア語諸方言との比較、さらにはセム諸語との比較を行うことで、これらの言語がどのような形で動詞体系の転換をはかっているか、またカイロ方言はいかなる発展段階に位置するのか、といった通時的な過程も見えてくるだろう。これは、類型論とも関わる興味深い問題であり、今後取り組んでいく必要があると思われる。

論文審査の結果の要旨

中道静香君の論文は、カイロ方言を含む口語アラビア語における動詞および能動分詞のテンス・アスペクト機能について考察を行ったものである。第1章（序章）では、先ずアラビア語研究史における口語アラビア語の位置づけを行ったのち、先行研究を視野に入れながらも、同君はこれまで研究が手薄な対話における談話の中に見られるカイロ方言の動詞研究に焦点をあてた「機能的アプローチ」に本研究の意義を見いだしている点を強調している。

第2章においては、先ずカイロ方言における動詞体系の実態を解説し、従来必ずしも科学的厳密さをもって定義されてこなかった各動詞形に対してテンス・アスペクトの観点から先行研究の諸成果を概論し検討したあと、同君が本研究の展開のためにとるべき立場を明確にした。カイロ方言には、具体的時間表現に関わる形式として、接尾辞活用形・bi-接頭辞活用形・ha-接頭辞活用形という3つの定形動詞があり、いずれも相対テンスと内的アスペクトを複合的に備えているとした。また、カイロ方言では、これら定形動詞の他に、能動分詞が動詞として機能しており、これは特定の時間表示に限定されることなく文脈により過去・未来をも表し得る点を論じた。

そこで第3章では、現在指示における定形動詞と能動分詞との比較分析に焦点を絞って考察している。従来、bi-接頭辞活用形＝進行相、能動分詞＝結果相のアスペクト対立とされていたが、本論文では、「結果」が主体に現れる場合のみを「現在」に属する能動分詞、「結果」が客体に現れる場合は「過去」に属する能動分詞と区別し、動詞の分類においては「現在」に属する能動分詞とbi-接頭辞活用形のみが基準として利用されるべきであると主張した。

次に第4章では、主に過去指示（未来指示も少しはあるが）の二つの形式、接尾辞活用形と能動分詞とを比較している。前車の問題が文レベルでの考察により両形式の差異を明確化し得たのに対して、ここでは文レベルでの考察だけではその機能的差異を抽出しにくく、「物語」や「対話」といったテクストレベルまで視野を拡大して両形式の違いを考察した。そこから、物語テクストに現れる能動分詞は、もっぱら接尾辞活用形に従属し、それが指示する過去との同時性を表し、単独形で過去を表す能動分詞が現れるのは対話テクストにほぼ限られるという結論に至っている。この章は本論文の中でも特に同君の独自性が窺われ、またアラビア語を越えて一般言語学的にも関心を惹く精彩のある論述を展開している。

最後に、第5章では、本論文で主役を演じた能動分詞に対して、脇役である受動分詞に一章が当てられており、古典アラビア語から継承した派生形による受動文の考察のあと受動分詞に焦点を当て、受動文の接尾辞活用形と受動分詞との関係を論じている。動作主を明示せず、減項が前提となるこの構文がもつべき、発話に値する情報量とは何かという視点から、他動性、叙述法などを考慮に入れつつ、受動文成立の条件を探っている。

本論文は一貫して、名詞の形態をもちつつ動詞として機能する分詞が、どのような形で動詞体系の中に組み込まれているかという問題を観察している。現在を表す能動分詞は、同じく現在指示機能をもつbi-接頭辞活用形と継続相を分担しており、意味内容レベルで相補的な関係をなしている。一方、過去や未来を表す能動分詞は、むしろ対人的なレベルで定形動詞との機能分担を行っているという点を結論としてこの論文を同君は結んでいる。

以上、中道君の論文は、口語アラビア語の動詞体系を記述したものであるとはいえ、随所に独創的な知見が見え、この分野では内外ともにこれほど明快かつ緻密な研究は見あたらず、大いに斯界に益するところがあるものと思われる。ただ、この仕事になお一層の完成度をもたらすとすればアラビア話方言学やセム系言語の歴史的・比較言語学的視座を加味すべきではあろうが、この段階のままでも同君の論文は博士（言語文化学）の学位請求論文として十分以上に価値のあるものと審査委員会では判断した。